

企画展「松戸の美術100年史」

松戸市教育委員会では、10月8日から企画展「松戸の美術100年史」を開催します。明治44年、洋画家の堀江正章は創設間もない千葉県立園芸専門学校（現在の千葉大学園芸学部）に、花を描くために通いました。それから、大正、昭和を経て平成の今日まで、松戸に住んで活動した作家たちの一世紀にわたる作品を一堂に展覧します。深まる秋の一日、松戸ゆかりの美術に触れてみませんか。

出品予定作家

田中寅三（1878～1961）、板倉鼎（1901～1929）、長田国夫（1911～1994）、宮之原謙（1898～1977）、奥山肇八郎（1907～1981）、その他現代作家

10月8日（土）～11月27日（日）

会場：松戸市立博物館（企画展示室）および21世紀の森と広場

観覧料：一般300円・高大生150円（中学生以下は無料）

この展示のお問い合わせ TEL.047(366)7463（社会教育課美術館準備室）



田中寅三《風景》制作年不明

●記念講演会 11月6日（日）13:00～14:30 演題：松戸と美術—美術家にとって「松戸」とはなにか？ 講師：天野一夫氏（豊田市美術館チーフキュレーター） 定員：80名（当日先着順） 費用：無料

まつど ミュージアム

松戸市立博物館情報誌

郷土の歴史を明日の松戸に伝えたい

感 動 体 験 博 物 館

No.
20

2011年7月

行事案内

展示

資料展「写真で見る昭和の松戸」 7/16（土）～9/25（日）

企画展「松戸の美術100年史」 10/8（土）～11/27（日）

学習資料展「昔のくらし探検」 平成24年1/21（土）～4/8（日）

ガイドツアー（総合展示解説）

常設展示室「人類の登場」から「都市へのあゆみ」までを展示解説員が解説。毎日10:00～・14:00～（60分間）◎参加者は観覧料が必要です。

ミュージアムシアター

①13:15～②15:15～上映（土・日・祝は11:00～も上映）
歴史・民俗・考古・自然に関する映像を月替わりで上映。上映内容は館内・館外の上映案内や当館ホームページをご覧ください。

こども体験教室

「土鈴をつくろう」

7/30（土）①10:00～11:00 ②13:30～14:30

「自分でつくる糸と布」〈全2回〉

8/2（火）10:00～12:00 または 13:10～15:10、

8/4（木）9:45～16:30のうちの1時間

「勾玉づくり」

8/7（日）①10:00～11:00 ②13:30～14:30

「骨ペンダントづくり」

8/14（日）①10:00～11:00 ②13:30～14:30

こども自然観察会

「見よう！触れよう！松戸の自然 21世紀の森と広場のトンボたち」
7/31（日）10:00～12:00

講座

「博物館館内公開」 8/13（土）①11:00～12:00 ②14:00～15:00

学芸員講演会

当館の学芸員7名が、考古・歴史・民俗の各分野から、日頃の研究成果を発表します。（市立博物館・友の会共催）

①6/25（土）実験展示「あるく—身体の記憶—」を検証する

②7/23（土）写真で見る昭和の松戸

③10/8（土）旧石器時代調査のあゆみ—松戸を中心に—

④11/19（土）小金牧の享保改革

⑤1/14（土）本佐倉城址（巡見）

⑥2/18（土）下駄職人の道具—収蔵庫をひらく1—

⑦3/17（土）韓国の古墳探訪—渡来人の故地を訪ねて—

★①は終了しました。

時間：13:00～15:00（②のみ14:00～16:00）

定員：80名 費用：200円（友の会会員は無料）

●この他の催しは、館内・館外のポスターやチラシ、当館ホームページ等でご確認ください。また、事前申込みが必要な場合は、詳細をご覧になり内容をよくご確認の上ご応募ください。

●ミュージアムシアターでは、音声の聞き取りにくいお客様のために、一部の席にヘッドフォンをご用意しております。係員に声をおかけください。また、講演会開催等で13:15～の上映を中止させていただく場合がありますので、ご確認の上ご来館ください。

●震災と計画停電の影響により、今年度の催しはやむを得ず変更となる場合がございます。ご了承ください。また、当館の行事等は随時更新いたしますので最新の情報をご確認ください。

●催しの内容は7/15現在のものです。



information

●平成23年4月1日より、中学生以下の方は市内・市外問わず観覧無料になりました。

●エントランス展示は、余震による資料の損壊を防ぐため只今中止しております。再開日は未定です。

●コレクション紹介

常滑甕 ～湯浅喜代治考古コレクションより～

戦国時代の16世紀、常滑（愛知県）で焼かれた大きな甕です。松戸市や市川市あたりで発見されたものと思われます。関東へはきっと太平洋の船旅で、塩や油や豆、何かを入れて運んだに違いありません。この甕は、遠く離れた下総国で、貯蔵具として永年重宝されたことでしょう。けれど、それも終わりがきます。甕の内側には、50円硬貨を一回り大きくしたようなドーナツ型で緑色の跡があらわに見られます。これは銅の錆の跡で、日本全土で流通した渡来銭が、ぎっしり詰められていたことをあらわします。最後の務めは、銭甕として土中に埋められることでした。陶器の甕や木箱に1万枚、2万枚といった大量の銭を入れて地中に埋める行為は、室町・戦国時代にしばしば見受けられます。ただし、これが土地の神様に捧げたものか、戦乱などを逃れるための隠し財産かは、見解が分かれています。謎だらけの資料ですが、いくつかの歴史が詰まっているのです。



一升瓶、何十本分か
想像してみよう。

写真で見る 昭和の松戸

History of Matsudo 1926-1965

昭和初年から40年にかけて撮影された写真約**140**点を、一挙展示。
東京の近郊農村から住宅都市へと変貌する松戸市の姿をご紹介します。

戦後の高度経済成長期、東京の近郊農村だった松戸市は、急激に都市化していきました。工業団地や住宅が次々と建設され、人口も年々増加しました。開発が進むにつれ市域の景観は、急速に変貌していったのです。本展では昭和の初年から、住宅都市へと発展していく昭和30年代までの松戸市の姿を館蔵写真の中から紹介します。新たに収集した戦時中に撮影された空中写真、木造建築が建ち並ぶ松戸駅周辺の街並や農村の写真を通して昭和を振り返り、郷土の歴史と文化に対する関心を深めていただけたら幸いです。

2011.7.16[土]—9.25[日]

開館時間

午前9:30～午後5:00(入館は午後4:30まで)

休館日

毎週月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、7/22(金)・8/18(木)～8/21(日)・9/16(金)

学芸員講演会 7/23(土)午後2:00～4:00

「写真で見る昭和の松戸」(博物館・友の会共催)

講師/柏木一朗(当館学芸員) 会場/講堂・企画

展示室 定員/80名 申込/不要(当日先着順)

費用/200円(友の会会員は無料)

松戸を時代とともに歩いてみよう。

戦前戦中の松戸

戦時中の昭和18年(1943)4月、松戸町・馬橋村・高木村が合併し松戸市が誕生しました。現在の松飛台にあった逓信省の飛行場は、陸軍に接収され戦闘機が配備されました。市民生活にも戦争の影が忍び寄ってきます。

戦後復興期の松戸

終戦後の日本は、インフレと食糧難に悩まされましたが、朝鮮戦争(昭和25～28年)、サンフランシスコ平和条約の発効(27年)を経て経済は復興していきます。28年、松戸市は市制施行10周年を迎えます。30年には新京成電鉄が全線開通し、市内のあちこちに開発の槌音が聞こえてきました。

高度経済成長期の松戸

日本は「神武景気」(31～32年)、「岩戸景気」(33～36年)と好景気に沸きました。昭和35年、池田勇人内閣は「所得倍増」を唱え高度経済成長政策を推進します。この年、常盤平団地の入居が始まり、他にも土地区画整理が活発になっていきました。人口増加が続く松戸市は、東京のベッドタウンとして注目を浴びました。38年、松戸市建設5ヵ年計画が策定され、市政全般にわたる長期都市建設計画が始まりました。

時代を切り取った写真の数々。そこから「昭和」を振り返る。



空から松戸駅東口をパチリ!

陸軍工兵学校空中写真(昭和19年6月14日撮影)

陸軍工兵学校は大正8年(1919)に開校した陸軍の教育機関です。左下、常磐線の線路脇から伸びるS字状の道路を登ると、工兵学校の正門(現松戸中央公園正門)がありました。門内に学校本部や兵舎が、門外は演習場が広がっていました。工兵学校跡地は現在、公園のほか裁判所、大学や小・中学校などが建っています。



レトロな駅前通りでした。

松戸駅前通り(「広報まつど」昭和32年9月15日号掲載写真)

今から54年前の松戸駅前通りです。旧水戸街道を背にして松戸駅(西口)を撮影したものです。昭和38年より始まった松戸市五ヵ年計画により駅前通りは一変しました。



新しい街、デビュー!!

常盤平駅前広場(昭和36年4月)

松戸市金ヶ作・五香両地区の約51万坪の土地が日本住宅公団によって造成され、公団住宅とショッピングセンター、病院、郵便局、小学校などの施設を持った4,839戸の街が誕生しました。常盤平団地の入居は、昭和35年(1960)から始まり37年に終了しました。この写真は、今から50年前の常盤平駅前の写真です。写真中央のけやき通り左側は、まだ空き地のままですが、子供たちにとっては絶好の遊び場だったことでしょう。

実験展示

あるく 身体の記憶

を、振り返って。

学芸員 青木 俊也

5月22日に終了した実験展示「あるく—身体の記憶—」は、平成19年11月に神奈川大学で開催された展示で、同大学非文字資料研究センターのご協力によって当館への巡回が実現しました。

この展示の特色は、「実験展示」の名が示すように、これまでにない新しい実験をおこなうことにありました。そのひとつは、歩行を日常のあいさつなどと同じ「身体技法」としてとらえることです。つまり、私たちが無意識におこなっている「歩く」という行為のなかに、世代を超えて引き継がれている「昔の歩き方」、すなわち「身体に記憶された歴史」を探ることが大きな主題になっていました。

もうひとつの実験は、観覧者に実際に歩いていただくという体験展示でした(写真1)。アンケートの感想では、昔の歩き方に対して「馴染み深い」「歩きやすい」などの感覚を感じ取った人や、自分の今の歩き方が昔の歩き方にそっくりであることを発見した人もいました。



これは、映像に合わせて実際に歩いてみることで、無意識におこなっていた「歩く」という行為を自覚し、「昔の歩き方」を意識化した結果だと考えられます。「昔の歩き方」を体験した後に、絵画資料に描かれた歩き方を真似てみる人たちがとても多かったのは(写真2)、この実験の成果を示しているといえるでしょう。